外史氏傳記

十二月之七

十八番

須佐笠松文庫

日本紀略抄記巻之七

十二月　前とは小月なり中とは大月なり云〇十二月乃和名を師走と云ふ師走とは
歳月　歳とは年なり月とは月なり
むかし仏名と称せしなり仏名とは仏の名を唱へて罪を懺悔する
なり仏名の日は三日なり
月をれい月とつけ
年の後の四日を四節と称す
はじめて師走と
況今月は法会月なり

朔日　殷の代に建丑月を歳首とせり今日すなはち
殷の正月元日なり四節の日とて朝日と云ふ
いもらして鄙と称し行事乃ち
まりしまやさられ八一年乃万事を報日と重く
かそへ年をもるとて行ふなり

八日もろこしにて臘八と云今日竈をあらため新しくする
へし 寒暖記に十二月八日俗臘祭竈神と行 案
是は竈をすつるなどつるなどこれ俗なり
物を洗ふ風俗遠国にて行ふ 穢と云なるべし
祝融なり 祝融とは竈神とする也 又春秋紀に
こしなへ祝融と竈神とする也 又春秋紀に
毎歳春秋無津糜祀を今乃人は竈
祀るなりとあり これもまた我国の竈神へ
○今日水を汲て壺等に入貯重へし 故人分に
臘中貯水 東華治一切疫病 製飲食 臘八日水

十五日 釈迦仏涅槃 此日なり 破邪論に周穆王五十二
年二月十五日佛涅槃とあり 周代は十一月を以て
歳首とす 故に二月は今は十二月なり 是を今世二月
十五日とするは佛滅日とする也 あやまれり
○上旬或中旬の中臘月の前に多く米と春
粥へしていとこの月の用とす へしもろこしにて冬春米
をもく臘日に米と春て貯置事なりとなん
花王法国楽府曰金馬石湖絳雪集 雲
十変採菖蒲 各賦一律 以識風土 是一冬春作臘日

春米為一家計多聚杵臼臼中畢事之土
瓦金甲綸年石壔名冬春米 出手事 一文割聚

○十五日此後屋中の煤塵を掃へし煤塵を掃に
世人多く初日と定て恒例とす然るに古風の多
き初日に掃ずして日の吉凶を撰び用ひ
陰書に準志を引て臘月廿四日亀尾掃塵也
あるいは年暮に至りて或又初日の掃と云
二十日 廿日後の事と古人は絳絳
ふく面とおもひ又絳絳を縫て膝を蔽ひ烏帽子を
さきぞろへとゝひて古くの法則とゝひ舞ひ

くるまあり世にこれをうんとい第手まいとつよこそ
部鄙共にまた所事なり
○下旬此間親戚を招て義宴を賀す又古人
下此間鰥寡孤獨貧困者此者を親族に招て財
と賑ふへし或親より貴賤の人師傅とする
人親分及奴人の病を療せ醫師なきもの多
況て奴婢なるものをとゝへ治療なるべし
出藥くせんとうこひて傳へ加へ
ほくへ鄙者なるべし元鄙者なれい強義行れ
すべ人偏とあつへ國務とめぐむ事なるべし財と

きしをそりにたくはへてあれはわさいひとなり
このあまり学表けれをとよくよめ給ふへきなるへし
風土記曰。呉蜀風俗歳晩相与餽問之謂之餽歳。又蘇子瞻
餽歳詩曰。農功各已収。歳事得相佐。為歓恐無具。
假物不論貨。山川随出産。貧富称小大。置盤巨鯉横。
発籠雙兎臥。富人事華靡。綵繍光翻座。貧者愧不
能。微摯出春磨。官居故人少。里巷佳節過。亦欲挙
郷風。独唱無人和。これといふもこれハ中華にても歳暮に
物を親戚に遣す事のありとみえたり
○又下旬比内年忘とて父母兄弟親戚を饗する事

はくこれ一とせの万事なく過ぎし事を祝ふことなし
蘇子瞻別歳詩曰。故人適千里。臨別尚遅々。人行
猶可復。歳行那可追。問歳安所之。遠在天一涯。已逐
東流水。赴海帰無時。東鄰酒初熟。西舎彘亦肥。且為
一日歓。慰此窮年悲。勿嗟旧歳別。行与新歳辞。去
去勿回顧。還君老与衰。按するに此詩の序に蜀俗酒食相邀呼為別歳と云り我国の年忘
とひとしく又揶揄代酔編にいはく淮人歳暮家人宴集
曰溜歳。此等の類を考みれハかならずしも年忘
も悪しきにあらず
の類なり

博奕戒詩卷七

○六月下の午の日白ゐとして上臈そぬけ
饗と一色をちらしたる一年の百菓子の中にて流
鏑にかして焼その灰を菓子に入るゝよし俗説
二十六七日　白玉餅と菓子屋にて
よみ白玉の前の日より別に餅を作り今日は幸
の用ゆるものと菓子屋へ
美にして久しく懐中に餅と菓子屋は味
用ゆる数多く歴て色黒くなるを黒砂糖
浪花大家此日より菓子屋へ
い常にやりとりなり元餅と菓子屋にて酒氣

あり菓子屋とり又は町一米とあつらへ
日の里は必ずしたひ初て氏神に
餅に用ひ又酒に氣ちがひ
を菓と用れい餅ゆるく黄れいなれて用
にすゝ必つくしてゆるとれしを菓と用ゆる
醸酒のゝく穀米と製とるゝ醫書にも
とゝかく高しく餅氏酒とゝ
氏ちゝと能見ゝ古れ
二十八日　屠蘇と合
○醫林集要屠蘇方　大黄　山椒　桔梗　肉桂　陳

各五分 烏頭 白朮 藜蘆 各一分 右八味剉三絳囊に
入り深日に井中に懸め元旦の朝に沈め元旦の夜出し
囊共に酒に浸し漬め置き翌元旦に井中より出し
取て囊ごと服す当年瘧疫と
不病 藜蘆毒ある物なれども性やはらかなれば用ひ来れり
○又方 本草綱目に云く陰絶之小便方云藜蘆方也 元旦の夜の辟疫癘一切不正之気
防風 一両 藜蘆 五分 蜀椒 桔梗 大黄 各五分 烏頭 二分五厘 赤朮 桂心 各七分五厘
赤小豆 十四粒 三角乃絳囊に入れて右の
如し 赤朮は茯苓なり桂心は肉桂の皮なり
○又方 出于月令廣義 大黄 一分 桔梗 蘆 各一分 川椒 去皮各一分五厘 白朮

桂心 各一分八厘 烏頭 炮去皮脐 一分 吳茱萸 一分五厘 防風 一分五厘 一両
○本朝屠蘇方 白朮 桔梗 山椒 細辛 各一分
大黄 二分半
○白散方 白朮 桔梗 細辛 各一分
○瘧瘴散方 麻黄 一分 今麦 山椒 細辛 防風 桔梗 乾薑
白朮 肉桂 各五分 已上三方典薬頭為安信濃方也
○凶日去の縄を絶り除日に用ひ之 紫法元日條下に詳す
晦日 又除日 沐浴 晩食 信濃より参候と用ひ之
晩食の後 士を去て中より参て 囊を焚て 四老女
去る歳戚乃家より 庶人は不自親戚の家

注て賞すべし

○屋中及宅中を掃除し門松をたて戸口に
注連縄を掛くべし

○今夜を除夜といふ又除夕といふ一年の終り
夜なれば注ぐしきてんとを
乃至蕎麦を多く三つ
切にして世を事なくて
過して此年を過ぎ
閑雲の風光花よりも
幼稚

頭を敷徳之分案ずるに一年の終り
なる事なり又佛家にて今夜を紀人の
年忘まつりとも
と云深度人
○今夜八度
酒宜爵蕎麦
所に焼と
行て湯気を
去て下人と
事なり

花消さしむべしと月令廣義にみえたり
○今年中一家の用所ありと云此葉を今夕門庭に
焚ハ疫氣を避と田家雑要にみえたり又今夕蒼朮
木を多く焚ハ疫鬼を避て生気をまねくとみえたり
○俗に今宵儺豆をうつべし　儺豆をうつこの意ハ禁中乃追儺も十二月晦日のことなるに今宵これを事とするハ古代の人の年をまもるの今昔陰陽家進儺之事をなしけるなるべし
と抱豆をうちて疫鬼をおはらふ年越同意なり
出よの外に疫鬼の祓ひ出す所を禁中にもむかしハ
陰陽寮さいもんをよみて上卿以下方違を挑く田因
ありて挑ろしまめの西をとふうちよまて

かくこともつきぬ内裏此日ハともとの如くなり又殿
上人なとも御殿のうちにて桃の弓葦の矢をもて
いたくふるまいて豆をうちて鬼をおひ
らふ事なれば今もやとみえたり　続日本紀ニ
文武帝慶雲三年天下諸国疫疾百姓多死
始作土牛大儺すと侍りこれそのはしめなるべし　又儺の事
周禮に方相氏ハ熊皮を蒙り黄金の四目なり
鬼を逐て二郎の鬼をくし都より人を追ひ
海の乃渡を祓ひて千代の鬼をおひ出す
帝に奏しこれハ清明ずよ鬼を除く四方の
乃物とをりて方丈の究と射し三尺三寸の豆を

いりて鬼は目をとうちしより埃嚢抄にしるし
俗の説に疫神の画像なりかの鍾馗の絵をも
又は鬼神と何とて人をみれは又それハやとぬされハ
儺を疫とおいたてふことなり儺のやうなる事を
周礼礼記続漢書の祭儀志にもみえたり後世は
続儀志にしるすといへるも鍾馗の図
衡の東京賦に詳なり又は衣赤丸の鬼疫をとまし
ここにまつるの後漢書の注に見えたる鬼疫の
中にあるは今国俗に豆うちをなす悪鬼風に
や
おにやらひとハ鬼を逐ふことなり源氏物語にもあやしと侍るも
儺をやらふといふなりおに追とハ大

きこゆりきこゆぬ人ハまさこまに角ありて佛書にみゆる夜叉のごとくお
そろしき形を物なりと書けりさるものあるにハ陰は字
を訓せり陰邪乃霊気とよりてハ陰邪乃気ある鬼ごとく人
をとらえ物を進ハこれとおいやらふなり　又陰陽ハ二気なるか
ゆへ〆さ物あれこそ驅邪のいちをとえ陽気正しく陰を邪なり陽を
善なり陰を悪なり此夜は陽をたすけ陰をいやしむ道理なり
又国俗豆をうつは鬼をうつとこ
なり按に古人の詩に灑於豆と称して
賭市作遅手鮮撫擲。赤豆诐方鬼眼精とあり是れ
大豆を投げて鬼の眼をうつさまなり豕の頭なり
故事にしるすのつこより夜の鬼を
鬼をくるも宮古はらしき風さとぬきそやらふ人は今なる鬼神
○今夜やとしのかしら大戟を折まさひる鬮鼻と云

鬼ノ人をくらうんとおもはゞ御たるべし 扶
囊物に見えられしこれ又妻恋ノ花ちる色い作風
もちろんにてすてこに土作見れよ動ノかりらと
ゆれい上ちの法をいそうまいあるさるべしも後
こうノ書よ桃翁畫繪画祇帳戸ちの作ノ言乳
幽鬼と書ものく出るものよ三人ゆれいその数ノ人し
○屠蘇と今日より井の水に浸し重へ一番ノ初ノ
酒菖蒲ノ酒秋ノ酒よ
一杯家酒菖蒲酒 明日元旦祝辞お納ノ言
明日元旦祝辞 新年上賀詞 呂恐梅花

又高麗ノ作水
旅宿夢枕ノ眠 寒ん仏事 精霊祭 故郷 今宵
思ノ年 秋髪ノ明朝又一年

又方秋歩ノ
更ちの杯 紀把一杯 碑字 碑字等 春来須臾 便是
仙ノ年事 蜀酒 一傍風

又玉酒ノ
今宵七夕 明年明日 俳句 吉春 五
更 春 気色 六年 没 宿 那時 意 俳風 老人 不覚 已
笑 後園 梅

古今集に　春道列樹
きのふといひけふとくらしてあすか川流れてはやき月日なりけり
續拾遺集に　藤原基俊
あつまもおもひのさぬ人はおくれてよのいそくまの年をかそへつ
玉葉集に　京極前関白家肥後
あらたまの年のくれゆく稲妻の影のさかひにはかなきもなし
堀川百首に　國信
何事をなすともなしに明暮てことしもけふになりにけるかな
又　顕季
いたつらにくるゝ春日のいかにしてはかなき年をつもるなるらん

○此夜獏の形を図して枕に敷寝れは悪夢を避るとて今の世俗にもおこなふなり俗説に獏は夢を食ふ獣なりとこれを用ゆといへり
梅花の獏は爾雅に出たり洪桐及竹をくらふ
唐代白居易か獏屏の賛序に曰く獏者象鼻。犀目。牛尾。虎足。寝其皮辟瘟。図其形辟邪。今
俗説之色沢。又漆細のごとく皮為生銭。則瘴癘消
腥外之氣これらの説と尤くの乃徳義八邪氣を
避る物なる故と言け事ともとる是ならへし夢を
食ふといへるはいかなる説を見得たるにや但獏字

書の大儀乃時伯夷叔齊と云る人ハ
山海経中に　されとも殺し事ハ殺人賊乃
思ひ出して形乃ゑ事ハ
こうり方に事ハ
と夢世乃一日ハ
うぬるとおくり
乃事ハ
冥とまぬるをんを
却て乃古人乃言ハ
うるそびよりそう

乃仮名城の夢の間　歌舞伎
の義乃仮名の考乃
○又と夜永と書く
引代遠霧又ハ
に涙とたゝハ世俗の
あふ人をとひねぐひ
乃たにあれ
○世俗ハ
よぶそ和三年
主て狩猟とのべ

乃仮名城の夢の間　歌舞伎
の義乃仮名の考乃
○又と夜永と書く　稽乃乃ハ
引代遠霧又ハ　ハ
に涙とたゝハ世俗の
あふ人をとひねぐひ
乃たにあれ
○世俗ハ
よぶそ和三年
主て狩猟とのべ

御堂の御ぶつ多し　鄙おをとろ所多し

これとゝ婦人女子のたゝかひをなして大夫のす
へき事ゝなりたる元世俗よ尾ゝて男女とのく年
数よりく山寅ゝ所ゝ　ゝく　ゝ　ゝ
年ありし年よりあるひい神よりの仏
おゝ記てゝ寅とまぬるゝ事とゝ　ゝ　ゝ
とをぐゝこれと幸ゝて民の財をつくむゝ
事ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
日参の御記ゝをゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

大ゝ元年ゝゝ七寅ゝ九歳と加ゝ七十一寅ゝ
まくゝと必ゝ七歳十二寅ゝ二十五歳三十四寅ゝ四十
三寅五十二寅ゝ六十一歳ゝ九寅と加ゝ九
老陽ゝ数ゝ陽極れゝ陰ゝ数ゝ元ゝ
ゝ人ゝゝ元年無事ゝ
ゝ必ゝ寅ゝ
ゝ尾年の事ゝ
ゝ神ゝ
善ゝ
ゝ神佛ゝ

武矣人ひとりに拘ひさせ給ふとしてつくる人
乃吉凶祥瑞をうれ天命を知いかるそのまことひ
とまぬる事多んやとて庭年と共乃事を知給ふ
なまい作すへうひんかうんかうく苦心をたこそ
もろこしに乃後世三の成代日と臘日と号し
代日祭とまつり又古代聖賢民を功ある人とまつる
よりて澤蕭儀よ足えそうて又聖賢の墓に臘い供
能とまつり蠟を百祭と号て国日にて長寿とかり
小を大を三千日乃百合今世伝ふ宮の中と称すは
百ふ食拍茅拍茅と称す三いあれ性ふき方久く

たくひて接せは此所数多の拍ちよ記す
○乾薑と製とる法　母薑と宮氏中のあて一七日
水四又日浸して取あけ皮と去日干野へし
○山茱とうらく所へしを法　山法茱くりたる
年久しき薯蕷と共に細刀うて皮と去切へ
て米粉とまぶらひけ糸よつぬき陰乾す鉄と忘
○糯米と粳米と海米とを法　一日あ浸し
一日い乾す如けもろ七次許久しく浸せい米氣
ぬまくあ、糯米い米て饂飩とし粳米い飯
とし粥として病人ふ用れい泄痢ととめ腸胃を補

てん腸よりつまる

○穀米と糯米と腐水に浸す日
浸し蒸籠にくむ　曝乾たく瓶に入貯置へし用
る時熱湯に漬置いて柔なる程にして搗て腸に
詰塞甚奇なり諸物乃測布に包てこれを沸湯に
投す出いまた湯に投たる毛日用道布に清布に包て鍋煎
○糯米に粉と糯米と法　上白米糯米と常乃
ごく臘月の水に浸し毎日水と少し二三日過て石臼
にてとく清ひて布に米と磨しあとへてをいの
にてとく澤とい再ひ石臼にて磨して又とす

ものを桶に入水と加え一昼夜浸すと云かくはく
毎日水と換く水を加ふ三日たつ過て後搾布
の袋に布に粉と入こしてあと去粉に大きこと
水とともに出す但一度に多く袋に入へからす多くれい
水去くし又袋にあつくしつくしあつ
去て袋にかしあつてきて日の内あ乾て方
附又こまかにして清平にしてよく乾て壺
に入こまかして氣の洩ぬやうにして周り附ゆる
くこねく餅にして蒸湯に投して後取水に浸して
食し出事習はくこと再蒸て食し又赤小豆の蒸て

くてこれをうけてくゑしたるを性能泄痢を
とめ脾胃を強くす事はなはだ妙なり
食氣滯あるものを用ゐて再煮て用ゐ但宿
○赤小豆と名づくる法　赤小豆を米の如く煮
とりてこれを入うして去りて清水にて洗
年を経ること久しくして半周して色換せず異月に変化の
色を用ゐてもよろしかるべし
○臘月に糯米を大なる物にて二三石ばかりにて後水
よいれ又二三日ばかりにて元物上に付て米粉と削
去て又臘月に入て蒸湯に入

蒸て米に沸湯を通して湯の中に垂て元物に雑
煮と決して久しくして取出し熟爛に煮して米
粉を糊にして用ゐ紙をもて作る性和して氣
と血を塞ぎ久しくとれば四月中に二三日に一度水
を換へ二月より毎日あらためて上よりつきて方
米粉を去れば腐敗し臭あり
○臘月にて米粉を製すべし久しくして換ずれば
米粉大豆と煮て大豆を石に水を石臼に入
粉食のお湯よりはあるまて出て後に出
ハ、こさえ次第よりはきて蒸れて蒸をあて氣

乃潮さりやうにむしてとかしたる白糖色まてとけい
能に煮詰てあつまる時又ゆをとかしあつめて
丸如一白ふくよくはく大氏法あつくと成より明朝
まてにてを用ひ新いかのうろやをとけたし
如此されい新と功とと多く石費して能熟し
豆汁石潮にして性全く味美なり為史と久し
くたさるよく熟せしめんとされい大豆氏けぬを
てのすてなる茶碗の味あり、

二三年一粒入れく
茶碗の味格也

○白米醤乃製法　大豆を石臼にて去水に浸し

蒸して熟して上白乃米麹を石臼にて成就石入塩三年
含くくうとつき桶に詰め至三年日たつ色て
用の味格く首く色白し

○丸升米醤と製する法　大豆一升麹一升泡糟一升
米糠一升塩一升右一切よつき合すなりぬのいりて
よし此米醤性強く腐敗に成者人に用てよし
魚肉をと煮こく能よし

○ぬうとと製する法　米のぬうとあつてかくこね
練みて能むして熟したる時米とたきまて
重量日多つまる時麹あしぬの一石に塩一升米

并醤油のうとと入白ふく紙つきせ丸上け温氣
乃砂うとさゝ〳〵桶ふくを瓶てをはめきと
たゝく至来年四月之丸〳〵又白こへつきてなの
器こ入置へ〳〵

○又法　ぬうとをはくかゝくこと大き丸堂の間
に海の如をよゝ〳〵桶てを瓶はくの入置十
四日許とへてかゝ〳〵あゝ時日より〳〵白ふくつきく
〳〵きゝと塩とをくしく白ふくはき合せ丸行を桶こ
てを瓶はくを器こ入と〳〵付置なり塩いかあてよゝ
うきんをよゝ〳〵古氏云法也久〳〵きとへて味変せ丸通

臭ゝ丸良法なり腸中に氣滯して食滯〳〵〳〵て
病人に用へ〳〵

○厚鬼と塩淹こする法　厚鬼皮毛をぬきて
腸と去洗ふす毛焼丸ゝ腸こ塩を一ちい入
又はゝりを海行ふくと塩と多くこと入又加ふ塩と
よく付足とつきとてゝ紙合せさうさゝにはゝて
一枚とけハ塩ゆきとゝゝ有ゝ紙こつきとゝ
苞こつきて行りさけ置へ〳〵法者丸塩淹丸法如此丸
○塩漬鏑乃法　海鏑を能洗こうり塩と多くはを
桶こ入ちめの如ちゝ時丸ちく一ゝ有ちきゝ有ちくと

合せ一服くらひて紙ぬすしとりきるべし
又鷹を包て出すこと乃ちよしけれとたゝかひて
こゝに包縄をくゝりつくるかけて一日干置
よりよ井戸へ入て塩出ぬ紙約束る時つりさけ置
へし玉蒸土を切て煮よし
○魚を糠漬乃法　魚を塩と分くさはりつけ
一日一夜置　麹又清酒三夜ヲ塩を法置
へし塩くゝ潮ぬれ八移しすり　千後取出し
ふきく塩と法云紙と巻くゝ乾と糠と塩
か入よりくひうきんよ塩と用ひ魚を乃塩か糠八
ふくん漬へて塩と出すこと魚を糠漬くのち

とりへとかるに重へし物へとかるに上の四方とき
乃ちくゝ縄玉ふまくまいてよしすれ方ハ
まこと風引をもく塩乃粕塩せれい魚を塩せす
を物と二度用てをよしそ時をへ粕をくハ渇或
塩ふと加へやりくけくよ
○鮭鱒ふと塩引とする法　大切ふと骨を去渇よ
漬ふ乃ふまくづくなるふくぬきすへへ千後
水もきれ屋下ふつりさけ置てよへ或紙ふつゝふ
上とこるにつゝを重をよへ用ふ漬せ乃粕魚れ出すへ
○鮭大根とふとる法　少きれ初日蕪蔓の皮と捨さり

根の末を細く小縄の如くあみ小縄を用ひ
風雨霜雪をとりのけ次日積如ようけ重て大きの
物をもて元三平日を重ねさしこみて
面れなくてぬ平れ出ぐようけを重へしひしと和
あつ和ちをもてして風味甚佳
○胡蘿蔔乃つけ物と製法へしを法胡蘿蔔の
大なるを五六を能洗ふ二三日日ならば失ぬるを
つけ重能洗ふをそれ改漬てよく初より
ふをもてつれい味変して酸しく久しくさせす
半蕎を又をもつけ入てよ

人乃生質より業平の業を地をろく人乃り一定と
称されい口吉をたらしめ次りやう氏人乃い業を地と数片
に切ようて猛月氏多に切をうつけ重ね多して漿
湯を数度泡をれい毒素をかくれしくにて性を
うせ次南星と又地的に元米を泡をろい漿湯
乃能をあるく生成をとひをて後を行け又漿湯を
入へしかけをれい毒をうす
業平の言葉を貯墨へしを雲乃数乃精英脱月を色と
微の毒を入る事を平をろ命の地中にうつをろをもを
地をひ風雨氏不侵やうにすして元脳雪水の功風甚大へ

結一切乃熱疾及瘧疹瘢痕乃毒砕酒吐疫と
治し目疾とゆやしこれと煮汁と作り膠と化れた味
甘美にして久く堪えとんて鶏肉を浸せい夏月を換
世涙又穀百果花蔬乃種まと浸せい寒多くして
蒙とせす其日にいたすす為て古高の疫疫後瘧
と治心と用令廣義より見えすいとく臨雪水みく寒
食麺とのりに考えく出和掛他乃れ表とすれい不蒙
臨月より志めるう香油と絶す甚い微毒不入膏
葉に用て神効あり婦人の乳はぬれい餐まく乾なり
飛せす多く義く紙乃葉の用えて他食業へ

これと用く功他油又臨月の孩胞と義
所て膏葉乃合すしと月令廣義乃通りう
凡乃飲鍼敷乃とうぐるの十月より四月までの月にぐ
ーあれ性よく志く繍せ世乃弱乃寒中とゆく良す
柳の枝と切て立春乃およ地乃揮い結せして根とせて
四月忍冬花と納毒しこれと五月茎れとく廣
てのめい瘡疥と癒す
冬月甚寒して霧乃者い衣うとく効珍て塗乃
或冬月乃義く凍死とるのゆう口脣すくこ口噤共
微義あるい生乃生てう冷衣と脱去て常人乃生て脱

なる衣とをいくつかれとつくるを行てゆ米と炊熟して袋
に入んとと麝すへし米ひゆ豆ハ又他の袋ゑ炊熟し
たる米と入て麝すへし或ハたきる竈の下れ熟原
と用るもよしうるはしてゆ湯ゑ入り目開氣開く
後或薑湯温酒粥ゑとかくて保養すへし先ちんと
と温ずして史とをくあるハ冷氣と史氣と爭て
必発す又雄黄煙熏等分と用て書と表に眼角に熏よ
熱地法志よりて十一二月甲ある把と食へるかあるにの
勢なり月令廣義よりて猿肉狐狸生椒と食ゑと
足氣ゑ燥ゑ果菓と食ゑるれ非と多食へるに

物れ筋骨と食事なるれ素書に書に盤と食
ゑるなり非人と害す牛肉と食ゑるなれ非と中
ゑ蛭と食ゑ多なり非乳と拾す蚌蝦乃類と食
事なるれ道ハ歳よりくは月のを牛乳と食へ
し他月これと食へハ病と為す
損軒乃説ゑ雜書の中はく正月の食把樂之流
ゑの多し無ゑ某月某物と食へハ某病と生ずと
以ての注湯家の物之と説ゑ
記ず紀之ゑ毛とうふ古れ方書に書ゑ
さ乃説ゑ草に書ゑ載ざる所のもれ多し考

作ものゝ法とゝのゝ事ハ今ハ書ハ雑書ハ紙
たゝとゝまゝ載て人ハ披閲ハ法をゝれ可見ハ
又人ハ擇ゝこれと丸ゝとゝるゝ事のゝ

十二月ハ古候ハ一居小郷ハ二猫妃巣ハ三鶯始鳴ハ
少雪ハ三候ハ水沢腹堅ハ大雪ハ三候ハ雉妃乳ハ五虹多蔵ハ六
水沢腹堅ハ大雪ハ三候ハ雉妃乳ハ五虹多蔵ハ六
東八月令及呂氏春秋
淮南子等ゝ

十二月蓋夜ハ刻数少きハ与沙異及翁大きハ与大
異反翁之月令廣義

日本紀略巻之七尾

都鄙祭事記

正月

元日　梦殿御節会　○二日　東西市始　○四日
兎毛牛頭始　○七日　梦殿御節会　墓面山奏
牛天奏　菜摘川神事　○八日　十四日より七日御修法
○十日　西京奏　○十三日　南都二経会　○十四日　十七
日より伊勢山田師御祈祷　○十六日　賀茂爆竹　清涼殿
迎春鶯　河内国平野御粥　摂津国住吉松囃子　○十六日
梦殿御手洗会　清涼殿　猿楽　摂津国魔堂会仏七日
○十七日　伶人舞楽　苑丁　○十八日　梦殿爆竹　○十九日

八幡疫祈あり　廿五日より法花会　○廿三日　東山善法寺
釈迦涅槃　○初寅　鶴岡会あり

二月

朔日　七日より南都西京東大寺四天王寺三月堂修二会　○四日
祈年祭　○七日　十四日より南都薬師の経　○九日　十禅師
出師釈迦堂　○十日　山科薬師寺会　○十五日
涅槃会　遅桜大徳松　東大寺開山忌　○十六日　観音
○廿日　法花会　○廿二日　天王寺僧人参　○廿五日　道成
寺会　出師天神御忌日　吉祥院天満宮　○
初卯　大原会　○初午　稲荷　吉田社　東福寺鐵

法会　和泉国水乃寺初午会　○上巳　春日会　○彼岸会

三月

三日　禁中闘鶏　伝右衛門　伝右衛門年　石山会　栗津会　土佐
御年　○又日　一条寺会　彼岸寺会　○六日　一条寺
法会　今日より十五日より清水大会佛　○八日　泉涌寺開山
忌　○九日　水尾会　泉涌寺開山辞の日　○十日　今宮
安楽花　○十一日　吉祥会　武分花見　○十二日　今日より四
日より天台釈迦像　日吉八王の　今日より十四日より善導大師
忌　東山観音堂　○十四日　五重会佛　○十六日　北野会
武州角田川大会佛　○清水の祭　○十八日　長谷会

○十九日　清盛新造の堂棟　○廿一日　東寺仁和寺弘法御忌
高雄　女房　○中の午（午の日二つ有り初の午を中の午と云）　稲荷の祭出　石清水臨時祭
金剛峯寺　光明寺　高野参詣

四月

朔日　別雨麻桑　○二日三日　南都多度の祭　○四日
廣隆寺　龍田祭　○八日　灌仏　山門戒壇堂一切帳　○
九日　清水祭　○十四日　東寺の法事　○十六日　三
井寺の開山祭　○十七日　紀州和歌浦　新宮踊
日光山東照宮祭　尾州名古屋御祭　○廿日　勢
田宮祭　○廿一日　高尾御供　○上卯　稲荷祭　宗像祭

○上辰　八幡祭　○上巳　六斜祭　別当賀茂祭　同堅田祭
○初申　大原祭　平野祭　○初酉　松尾祭　○初亥　大津祭
○中子　吉田祭　○中卯　別当八幡祭　○中辰　四日四天祭
○中巳　久世祭　○中午　賀茂祭　別当茶の会祭　○中
申　賀茂祭　山王日吉祭　六月祭　○中酉　賀茂
葵祭　松尾祭　梅宮祭　関白厳島御参詣　○中
亥　住吉祭

五月

朔日　賀茂競馬足揃　別当松本祭　○五日　賀茂競馬
菖蒲祭　鶴の頭祭　○七日　今宮御霊御出　○八日

[illegible]○十三日 [illegible]○十六日 今宮参○廿日
宮浦宿見○廿三日 坂本表社参○廿八日 住吉御田うえ
○晦日 祇園御輿渡

六月

朔日 廿九ヶ宮富士詣○二日 宮旅の出拂 八日まで○六日
祇園会御渡初○七日 祇園会 今日より十四日迄祇園
御旅宿○十四日 祇園会 尾別当潔参 行事潔参
御後鞍天王参○十六日 尾別当潔参 汐見山参 三年に一度
筑前博多祇園会 化山笠 [illegible] 参 小倉祇園会○十六日
今日より明日迄伊勢参宮○十七日 本圓寺懺法 参詣

参 厳島参○十八日 祇園御輿入○十九日 四王寺山
細原 今日より○廿日 鞍馬寺作切○廿一日 明日より乳の納涼
○廿二日 大坂定番参○廿三日 松尾祭あって能三番
明日より五番○廿四日 光定千日法○廿五日 祇園の出年
[illegible] 大坂天満祭 松尾参○晦日 [illegible]月
祭 住吉御祭 祈願[illegible]日参○市月 安楽寺天満市月

七月

朔日 [illegible]後日祭○六日 小野御手洗○七日 小倉社
壇燈拂 [illegible] 并地獄立紀 [illegible] 并及鞍 [illegible]伏
[illegible]入○八日 文殊会○九日 六度詣○十日 清水寺詣

○十三日 十五日より表年祭を修する ○十四日 禁市を修する ○十五日 八幡安居の終 三年寺之安居 英勝院殿 今日より明日まで宮殿山石動不動日参 十七日より泉涌寺法一死帳 ○十六日より大山参詣 大の字 松の字 妙法の字 西加家紋 松の大 松の字 紀の家紋 松の字 表より此より今日まで 勢州山田参詣 ○十七日 棄子の喜日参 ○十八日御堂宮御出 ○廿四日 地蔵参 ○廿五日 盂蘭盆踊

八月

朔日 禁市一八 宮より御宮参 松尾社撲 和泉国より村参 明日まで ○三日 堺天祢参 ○四日 小野天祢参 地蔵

敷賀氣比宮参 ○五日 別当殿一死帳 山門より出 ○十五日 御所八幡参 若宮八幡参 畑枝参 八幡放生会 参詣 宮参 大坂江川より花火 廣沢屋見 江戸深川八幡参 赤門参詣 蔵前参 ○十八日 御堂参 棄子参 ○廿二日 廣澤寺参 ○十八日 御堂参 棄子参 ○廿三日 廣澤寺参 ○廿四日 地蔵参 ○廿五日 吉田参 ○彼岸一寺

府天祢参 ○廿四日 吉田参 ○彼岸一寺

九月

朔日 山参 木幡参 ○八日 泉涌寺参 ○九日 鶴岡参 毛布祢参 硯瑚参 紀之御参 大坂生玉参 蔵前 宮良大明祢参 熊野参 浅草観音参 ○十日 下谷稲参

大津江往来祭　五條天神祭　山科口の天祭　伏見口番所祭
○十一日　住吉参詣　出御　高辻殿御祈願　○十二日
大祭祭○十三日　白川祭○十五日　宝会祭　粟田口祭　白川明
神祭　三年二度祭　河内一宮祭　北野　小倉祭○十六日　東
山番祭　五条祭○十七日　松尾池田呉服祭○廿日　下京
宮祭　多祭祭　竹田祭　建仁寺門内夷祭　鞍馬
の祭○廿二日　大坂住吉祭　宮祭○廿三日　春祭○廿四日　園の祭祭
本願祭　浄土寺祭　麻賀祭　新宮祭○廿五日　天満流満宮祭
田祭祭○廿六日　小山祭○廿七日　松尾神祭○廿八日　鳴滝祭　大覚
五祭祭○廿九日　清水祭○晦日　安義寺祭

十月

五日　取合造　十六日　浄土寺祭　十六日　菊数　無福
寺法会祭○十日　僧侶会　長祭　十六日　無福寺　上会○十
三日　日蓮宗　彼岸○十五日　清水　廉王院　霊宝　彼岸　松尾会
彼岸○十六日　高福寺　彼岸祭○十七日　内侍所　神祭○廿日　江
戸　商人　夷祭　四條寺　土佐　宝物　公開　○中亥　岩戸神祭

十一月

八日　ふいご祭　鞴祭神の祭　○十三日　市屯祭　○廿二日　一宮ふ一五ふ
廿三日　玉造　佛ふ　○廿四日　大師講　智恵大師　○廿五日　廿八日
春日御祭　○晦日　六人祭祭　○初申　大宮　松尾祭　○中宮　鞍馬祭

十二月

十五日 八幡安居祭 〇廿二日 大原寺天皇忌 〇十九日 廿日 廿一日
梅尾山仏名経 〇晦日 祇園をけら参り 是元日の子夜也 知恩院
乃鐘ヲ 〇節分 各所追儺 吉田社
此部国々の大祭古儀とも是を知る人まれなれとも あらましをしるす
遊観庶流其外あまたあれと 是を略しぬ ゆくゆくこそ
ゆくものなり

紀逸記之

旹貞享五年戊辰三月上澣 雒陽書肆日新堂壽梓